牛地記行

足助吟社

牛地の里より笠流信濃路ゆきし時の
ゆきもたのすゝねと花のほどなく今もすぎの此
安藤武之輔

はるのゝとゝんまいはれあさぐもれ　　猿島
よけをもとるのゝうぐいす婦山　　泉池
小道ふのゝもひなの餅るれや　　赤宇
たをもつけさる縄の夜もあり　　寒馬
月遠く狩の使ももるゝとて　　太橋
苔を穂ひろの風ちるなを　　攘夷
戸を閉て窓ほゝむ八朔を　　蘭月
箸をとる秋をきうね雑汁　　真文
窓の景ひろなる園一たるゝ　　象雨
雨合のまひるむせへ軒夢　　亀
水苔のみつのひらき軍あを　　池
ひとつくらしてその雪うふ夜　　守
木魚と角をとるの神世月　　馬
根芋つまんでしる有月　　橋

ノ雲の母のくみの花さまを　　雀
魚ふる引ゆ蚕をさまり月
かくとしても乱れ小うさ
なつき　国ら夏のまたきり

海月を摸題

蒸しむしのうちのうちのうち